スマート農業の死角を読んで

近年、スマート農業を推し進め農業の効率化をすすめようという論調をいろんな場所で耳にすることが多い。実際にそれらが身近に普及しているかといえばまだそうは言えないだろう。実家が農家であるが、ここで定義されているようなスマート農業機械や機器を導入しているような農家の数はとても限られていて、身近なものではない。とても珍しい存在であり、規模が大きく営農の資金に余裕がある農家さんがスマート農業機械を導入しているようなイメージがある。一方で資金に余裕がない農家は今まで通りの農業を続けている。このように記事でも述べられているがスマート農業といえば大規模な圃場で使われることを想定してシステムが作られているものが多い。

今はまだ導入の初期の段階であるので最初から様々な規模の農家に適用したシステムを作る必要はないと思うが小規模農家の方々もスマート農業による恩恵を受けれるような環境作りをいずれはしていく必要がある。

個人的な考えではあるが、農村とは離れた都市部に住む人たちに農業を体験する、棚田オーナーの取り組みにスマート農業の技術を取り入れると面白いのではないかと考えた。今の取り組みでは、棚田の主な管理は地元の方で行うものが多い。これを遠隔の水管理システムや、草刈りロボットを使った管理をオーナー自身が遠隔で行うというのも可能になるだろう。そうすることで今まで以上に農地への思い入れがわくようになり農業への興味関心を高めることにもなるだろう。

ウイズ生成 AI の時代を生きる

AI という単語や仕組みについて聞くことはあったがそれを実際に使う世界というのはまだ先のことだと思っていたが、いつの間にか自分たちの携帯の中であったり、検索エンジンに搭載されていたりといつの間にか身近な存在となっている。上手に使えば情報収集であったり、単純作業をより早くできたりと作業を効率的にできる便利なツールになる。しかし、その AI の仕組みや欠点について詳しく知らない、知識が足りないまま AI を使っているので AI が作った嘘の情報などに簡単に騙されてしまう可能性もある。どんなことにも言えるが、その技術がどのような仕組みで成り立っているのかを詳しく学ぶことが上手に使いこなすための初めの一步だと考える。